池上二良教授を送ることば

内田　實

池上二良教授は札幌大学女子短期大学部文化学科に昭和59年4月御就任になられ，平成3年定年退職になられます。その間，7年にわたり文化学科の文化学概論等先生の御専門をベースにおいた授業で学生の信頼を集められました。同教授の北東アジア諸民族の言語に関する業績は，北海道大学御在任中のアルタイ語，特にツングース語なかでも満州語，ウイルタ語（オロッコ語），サンタン語（オルチャ語），エウェンキー語に加え，アイヌ語，日本語方言，言語学全般にわたる業績の拡大発展を，本校御就任以来著述目録にみられるようにアイヌ語，ツングース語，満州語に加えさらにウイルタ民俗の調査研究等々数多くの業績となって蓄積なさいました。

一方，日本学術会議東洋学研究連絡委員会委員，北海道文化財保護審議会委員を併任され，昭和60年にはイタリアベニスの第28回国際アルタイ学会議，同61年は西ドイツハンブルグ第32回国際アジア・北アフリカ研究会議，平成元年には韓国アルタイ学会，同年イギリス・オランダ・フランス・西ドイツにおける北東アジア言語の文献調査を2ケ月にわたり実施なさいました。

池上教授の御研究のルーツをみますと，大学院学生時代（昭和24年）から，北海道に移住したウイルタ語（ツングース語のひとつ）継承者の人々，特に佐藤チヨ女史との出会いから始まる。『北海道の文化』54（昭和61）から引用すると，「わたくしは長い間佐藤さんからウイルタ語について教えていただきました。そしてウイルタ語とはどんなことばか，どんな仕組になっているかを知ろうとしました。ウイルタ語をふくめてツングース語については，古くからロシア人など多くの外国人，それに日本人も研究してきました。しかしこれまでの研究では，なおくわしくみると，あきらかでない点や疑わしい点があります。……佐藤さんはウイルタ語についての正確な知識を与えてくれました。それによってすでに知られていることをたしかめたばかりでなく，さらにいままであきらかになっていなかったいろいろのことをあきらかにすることができました。またウイルタ口承文芸について，記憶されている限りの諸篇を口述してもらいました」と。36年間にわたる佐藤女史と池上教授の英雄物語をはさんでのやりとりは，人間と人間との暖かい関係を，学問に対してはあくまで謙虚に，そしてツングース語の比較研究に発展していったその人柄を如実に示し，さらにウイルタ族の英雄物語に至る発生と伝播への探究が関連諸物語の研究となり，サハリン，中国東北省からソ連モスクワ，レニングラードへと展開されたのでありました。平成2年には団長をかねて満州，サハリンの調査を実施されました。ツングース語の第一人者として，国際会議の主役としての御活動は今後もさらに続けられるものと思います。

ここにこの紀要を池上教授に捧げるに際して，御健勝とさらなる研究の発展を祈念する次第であります。